Kurume SHIN-AI women's College

久留米信愛女学院短期大学研究紀要，第 34 号，69～74，(2011)
KURUME SHIN-AI WOMEN'S COLLEGE BULLETIN, No.34, 69～74, (2011)

造形教育における感性の概念

三　原　信　彦

The Concept of Sensibility in Art Education

MIHARA Nobuhiko

In this paper guides to the new posibilities by discussing the way how we accept "the sensibility" and creates a sense of value and influences over in Art Education.

In the Art fields, as we already know, many different perspectives have kept discussing sinse recorded history and those are still brought about in new ways at the present time. It seems that those create some kind of values, on the other hand, those bring destructions and shifts at the same time. We'll see some proposals or clues to the understanding of people in what we can touch. I believe that to jump out of an ordinary life, so to speak, a large-scaled Art world have a depth and abundance effect on a child nature.

Key words：Sensibility, Art Education, concept, emancipation, suppression
キーワード：感性，造形教育，概念，開放，抑圧

Ⅰ，は　じ　め　に

幼児の造形教育において，「感性」という概念が多く語られているが，感性とはどういうものなのか？また造形美術との関わりにおいてどのように取り入れられ，それらが価値観を形成し，教育面でどのように影響するのかを考察することにより，新しい可能性を探っていく。

幼児期における造形教育の現場では，造形の持つ遊戯性という側面が重視され，本来，感性の開放を目指す造形の美術・芸術的な側面が軽視されているようにみえる。これらは指導者の技術・意識そして自身の質的な向上等の現実問題があるのだろうが，幼稚園教諭・保育士などを育成する機関・養成校もまたこれらの問題に責任を負っている。

また日本の美術教育の構造的問題。実際に美術及び芸術の専門家養成機関，（高等教育としては大学等がある。）において，専門課程でも教職免許資格を取る事は出来るのだが，教育者養成部門が切り離されているため，教育職に距離を感じてしまったり，必要な技術を最小限しか学べないなどと実際の教育者になり難い点などがある。その結果，高等な美術芸術教育をうけた理解力が高い人材が現場に入る数が少なくなり，高度な内容がフィードバックされて質の向上が行われる事が少なくなっているのが実情なのだろうか。

教育を取り巻いている現代社会の状況は，経済的裕福さの向上や情報化の推進と共にアートというものが身近になったというプラス（正）の側面があり，いっぽうでは，その文明の過剰な発展の反動から，人間本来のあるべき自然さや真実の姿が抑圧され排除されるというマイナス（負）の側面がある。時代の流れと共に文化も変化しその主要たる位置にある芸術・美術の価値観も変遷し，人間観・人間自身の姿の捉え方も変化している。現代の主軸である科学的思考によるアプローチから露わになる"真実"と，複雑化する社会からの要求や文明の進展がもた

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

らした生活様式・意識もしくは自然も含む環境変化。それは抑圧を強いて歪みを生む外圧であり，現代社会のこのような状況下に生きる者こそがわれわれそして子どもたちであり，直面する現実である。

本論は「感性」をキーワードに時代の変化と，視え辛くなった人間の本質を読み解きながら教育のヒントを探り論じていくものである。

人間は創造的活動を行う生き物である。人間内部の精神的活動を様々な方法で表現できると同時に，外部環境に働きかけて自分たちの都合の良いように作り変えることが出来る存在でもある。近代になって，人間の持つ理性からすれば自然は克服すべき脅威を与えるものとしてみなされ，それらを改造してゆき，同時に人間内部にある自然な部分も理性の名の下に，卑俗な本能として扱い，そして排除してきた。文明の発達と共に生み出されたもの，快適性・利便性を追及した機構と機械たち，制度・慣習。それらを必死の活動によって創り出してきた空間。幼児たちが生れ落ち，育つ空間も，まさにそのような活動によって出来た場である。

Ⅱ，「個」としての感性と社会的な感性

「健全な正しい“感性”とは？」と尋ねられたら通常，どのようなイメージを持つだろうか。「個人の自我が自由で幸福であるために精神・情緒の面でも健全で人間的に生活を送ることが出来る」ための“感性”，自然に内在する美や，芸術の美的作品を感じて感動を享受できるという“感性”。これに教育的という都合が入ったときには「社会に対してその価値観とルールの要求に適応し，社会的生活を支障なく送る事が出来る」という意味が加わって，感動や美の基準である“感性”を他者と共感・共有し協調できる，という意味が生まれる。切り離された個人内部だけの感性は直接見ることはできないものだが，この場合には前提として生物学的に見てもおなじ人間なので，他者同士であっても感じ方もおなじであるという観点がある。もしこの前提を少し疑ってみれば，生れ落ちた環境の性質または本質の違い，または現れかたの違いによって変化する“感性”がありえるはずだ。社会にはアウトサイダーまたは少数派など，社会的に見て異質なものを排除する論理がある。しかし個人の中だけにしかない個性的な“感性”があるはずである。後天的に慣習や偽の環境から押し付けられたものではなく，深い本質より元来存在する「始原的な感性」または生み出され，それは常に発展しいつでも発現する可能性がある「生成・創造される感性」等の存在があるとしよう。そして，自由に発現する「個」としての感性があるのにそれを認めないとするならば，そこに歪みを生み出すのではないだろうか。この「個」としての感性はそれを持ちえない者にとっては理解し得ない性質のものかもしれない。「個」の中の感性を深め，他者の「個」としての感性に対して寛容であることが必要とされる。

Ⅲ，感性を発現させる教育

子どもは本当に純白の何も書き込まれていない「白い紙」のような存在なのだろうか？「子どもは白紙である。」，ある場と時点ではそのような視点に立って教育を行っているものだが。社会は様々な圧力を持って人間本来の姿を抑圧し歪める。子どもは生れ落ちたときから既存の環境の中に放り込まれる。車やテレビの騒音，エアコンの温度，着せられた服や家屋の壁と照明，親の話し声，そして社会の慣習・制度。ここからはあくまでも思考実験だが，想像して頂きたい，もしも，ある何も無い星に（空気や水・食料などの生存条件は揃っているとして）こどもが置かれその子どもが育ったらどのようになるだろうか？どのような社会を形成するのか？どのような思考パターンで思想・哲学を生み，宗教そして芸術はどのようなものになるだろうか。子どもはわれわれが知っている以上になにかを持っている存在であるという，あくまでもここでは仮定だが（私は個人的には仮定ではなく現実だと思える。）そしてこの現実社会の圧力のために，または適応するために排除または，

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

抑えられてかくされたなにものか，それは深い本質に根ざした感性であり人間にとっても重要なものであると考える。

社会的に認知された感性というものには必ず社会的，またはその時代における価値観が入っている。理性や理想の精神に基づいて善悪や高低などに差がつけられ，受け入れられるものと排除されるべきものという選択にかけられる。純粋な感性が重要であるという観点からすれば，その選別は歪みを生み出すといえる。それらを共有・共感する集団の中で，その生活慣習の中に浸りきっている為に，もしも「感性の歪」が生み出されても気付くことが無い場合がある。それが普通で当たり前と思っている人間観・価値観。これらがもし不自然なもので本来の姿から外れていたとしたら，我々は何を目指さなくてはならないのかという問い掛けをしたい。

本来の理想的な形という点でいえば，造形美術の領域には人間を取り巻く全存在が含まれる。絵画などでは視覚的な色彩・形態・空間・量・バランスなどが中心となり，彫刻・立体造形の要素として強いものに，触覚に関わるものとして素材にまつわる手触り，質・画肌・重量の要素もある。

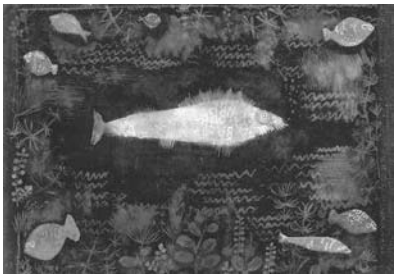
感情・情緒のような意識活動の様々な反応がこれに加わるのであるが，それらも含めてどうしても卑近なまたは捉えやすい感覚領域に偏ってくる。たとえば感じやすい生理的反応や身体的欲求または本能的な部分である。色彩を例にとって見てみよう，色彩への反応は生理的，もしくは動物的な反応が捕らえやすい，たとえば〔赤→興奮する・血液・危険〕など。さらには社会の共通認識，例えば「赤は赤である。他人も赤を赤と感じている。」というものや，「赤は同じように血を連想し，興奮を覚えるはずだ。」というような前提とまたは「女性を象徴する色としての赤」などの文化的価値の枠組みなども入り込む。このような固定概念は真実を視るためには支障をきたすものであり教育的意義からすれば人間本来の成長の姿を阻害することになるのではないだろうか。

Ⅳ，幼児の『にじいろのさかな』とクレーの『黄金の魚』

ここに二枚の絵がある，一枚はある６歳の幼稚園児が描いた『にじいろのさかな』（図版１）と，もう一枚はパウル・クレーが描いた『黄金の魚』（図版２）この二枚から考察を論じる。ここに類似や関連または他の可能性を見出している。

（図版１）６歳児画・『にじいろのさかな』
（素材：紙，色鉛筆）

解説：絵本スタイルの１ページであり，お話の文章も同画面に書かれている。何かを見て描いたものではなく，通常時に湧き上がったイメージを描いたもの。



（図版２）参考図版，パウル・クレー・『黄金の魚』

『にじいろのさかな』は作者幼児が普段の家庭生活の何気ないときに描いたものである。ストーリー（お話）がある絵本仕立ての作品の中の１ページで，そのストーリーを要約して紹介すれば，「タイトル：きかんしゃのたび　―き

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

かんしゃが朝日ののぼる海をゆき，そこに『にじいろのきれいな魚』が見えた。そして山をゆき，美味しそうなりんごの森があった。」というものである。ここでは物語性があるというのも重要なポイントである。

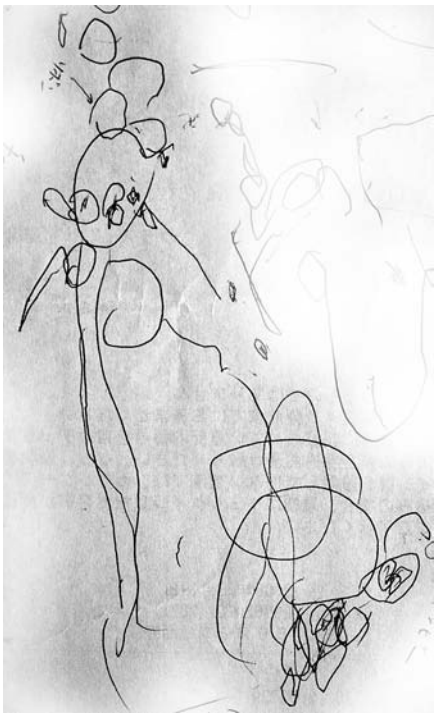
魚には様々な象徴性を感じる。古典的なキリスト教ではキリストの象徴であり（これにはラテン語でのつづりがキリストのつづりに似ているところから関係するという説があるが），ユングによれば，水は無意識の象徴であり，その住民である魚は無意識の中の生命の象徴でありまたは無意識の自立的な部分の象徴である，同時に魂の治癒を願う無意識の心である。

クレーは説明するまでもなく20世紀を代表する芸術家の一人であるが，幼児の絵にも関心があったことが知られている。幼児が自発的に描いた魚とクレーの魚。色彩は虹と黄金（タイトルでは黄金になってはいるが背景を含め彩度の高い原色の様々な色相スペクトルを見出すことが出来る。）ここに存在している彩度の高い様々な色相スペクトルの中に奥深いものを感じられるのではないだろうか。魚の現実的な固有色を超えたところに我々は何を感じることが出来るだろうか。色彩の持つ特別な意味と力は通常教育では取り上げられないといっても良い。クレーはその芸術的感性をもって色彩の魚のビジョンを視て，一方，幼児はその純粋性から色とりどりの魚の直感的なビジョンを視る。このような直感的なビジョンには，人間の始原的な何かが含まれているような気がしてならない。多くの芸術家がインスピレーション（直感または霊感）と呼んでいるものもこれらと類似したものだろう。

もしかするとクレーは幼児に帰ってそれを見つけたといえるかもしれない。幼児に関心があるということは幼児期に見られる感性が重要なヒントであると気付いていたということであろう。

もしとある絵画の指導者が（ここでは固有色の観察を主眼とするタイプの教育を受けてしまっているために）何も気付かずに魚の色は本当は「どんな色なの？」とこの幼児に問いかけていたとするならば，おそらく幼児は自然な発現を抑えられて葛藤を覚えるか，素直に命令どおり普通の固有色に置き換えるかをするだろう。こうなると幼児の自然な発現する可能性が抑えられたことになるはずだ。

（図版３）この２歳８ケ月男児の絵は「犬を散歩させるおばあちゃん」の図像である。犬を結ぶ紐，髪結び，人が歩いている姿を映像的にも詳細な情報を含んでいる。この画は実際に起こった出来事その日に見た事柄を後になって描いたものである，三歳未満の幼児の絵としては詳細かつ多くの情報を記憶，認識していることが解る。映像的に直接記憶する要素が多いのだろうか，それだけではなく大人が想像する通常



（図版３） ２歳８ケ月児画・『犬を散歩させるおばあちゃん』

（素材：紙，ボールペン）

解説：実際に見た事物を後になって描いたもの。左が人物像で右下が犬，紐でつながれている。認識した詳細な内容が捉えられている。

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

とは異なった世界の認識があるのだろうか。パッと目にはただのなぐりがきのように見えるもので読み取り辛いのだが，幼児自身が語った内容を聞いてみたり，さらにいえば，観察者が絵から直接読み取る力があれば，そのことが理解できる。子どもは我々大人が想像しているより多くのことを認識していることに気づかせられる。同時にその世界が想像したよりも広がっていることも予想させられるものである。

Ⅴ，感性における既成概念と教育

幼児絵画においては，幼児に対する固定概念と未知の部分が常にあり，現場では好きに描かせるという状態で，そこに見えるはずのものや描かれた絵からの読み取りがなされることが無い。解釈や読み取りには価値観が付きまとうのであるが，特に絵画を文字や言語で解説した既成のテキストを参考にして読み取ることさえも問題を孕んでいる。幼児が赤を使った絵を描いたとする，「この子は赤が好きなのかな。」という風にしか見えないが，既成のテキストを参考に赤に対する解釈をすることになるだろう。そこからさらに踏み込んでなぜその色を使ったのかを理解することや，その色彩の中に含まれる何かを理解しようとすることがあるだろうか。このあたりは指導側の個人の能力であり洞察力とやはりセンス《感性》の問題である。これらは個人の中で構成され育成されるものであり，指導者の側からすれば個人技の領域である面が強い。教育養成現場において具体的には実践実技を通して養成されるものであるが，それ以前の教育を受ける時までに構築されている，既成の概念をどのように超えられるかが重要な問題である。この既成概念は（固定概念と同意味）前出ではあるが，社会規範やとりまく環境，価値観・思想から来るその個人または自我を染めて枠に入れ，歪めているものを指している。

幼児期の絵画教育においても社会一般的に認知されるのはこの既成概念の範囲内である。しかしそれらは人間の持っている領域のごく一部分であり，意識や精神の未知数の領域については触れることがない。社会慣習・価値観によりまたはそれらを含む環境に順応する為に排除され抑圧されたものを気付き，発見するという客観的な視点は持つことは難しい。

Ⅵ，教育における芸術の可能性

そこで芸術という視点，人間の高次の精神活動である芸術という要素からの視点を導入してみる。言うまでも無く，芸術分野には有史以来の歴史的な蓄積があり，現代においてもまた新たな視点がもたらされている。「真・善・美」という受け入れやすいものだけではなく，それらと対立するものでさえもその範疇としている。文明の中におけるトリックスター的な機能と存在意義もある。あるときは価値を創造すると共にそれとは相反するような転換と破壊をもたらして来たといえる。ここで芸術の定義を深く論じることはしないが，今われわれが触れることができるものから，人間理解のヒントや提言を見ることが出来るだろう。芸術の持つスケールの広がりと日常視点からの飛躍は，幼児期における人格形成にも奥深さと豊かさを与えるはずである。

Ⅶ，今 後 の 課 題

芸術が歴史的に浸透している文化的先進国では少なからず民衆の間でも芸術に関心もあり，存在価値や意義に対する理解力があるようだが，我が国，さらにいえば特に地方の実際の現場では理解がまだまだ乏しいようだ。これは私自身が見て取った実感である。近年では，私の受け持つ高校卒業後間もない学生が実際に，美術館へ自発的にもしくは学校の教育の一環でも一度でも足を運んだことがある者が，わずか全体の半分から３分の１以下程度だった。（これは講義中に挙手をさせて数える程度の調査であるが，実態に近いものと認識している。利便性のある地域に美術館などの媒体も少ない。）しかも芸術・美術類の他のメディア（テレビ放送・映像・活字等）にも触れる事が少ない。低年齢からの

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

環境と教育による意識の底上げが大切であると思うのだが，このような現状ではなかなか芸術に対する理解が進まないのは確実である。

現状の教育ではまだまだ感性の領域が偏狭であり様々な要因からそのようになっている。幼児教育における美術教育において，幼児の持つ無限の可能性を見出し，“感性”を解放する，つまり人間性を解放することが目標である。これを現場から見てまたは現代社会の状況から考えることが要求されている。私自身が指導者育成の立場からも高い教育目標を持って当たらなくてはいけないと考えている。

参　考　文　献

1）『トリックスター』（晶文全書，1974年）：ポール・ラディン，カール・ケレーニイ，カール・グスタフ・ユング
2）『芸術による教育』ハーバート・リード著（フィルムアート社，2001年）
3）『元型論』カール・グスタフ・ユング著（紀伊国屋書店，1999年）
4）『シミュラークルとシミュレーション』ジャン・ボードリヤール著（叢書・ウニベルシタス，1984年）
5）『知能の心理学』ジャン・ピアジェ著（みすず書房，1998年）

（2011年３月31日受稿）

NII-Electronic Library Service